



・ギャバン)と貴族出のポアルヂウ(ピエール・フレネエ)とユダヤ人のロザンタル(ダリオ)が一緒になる。そのほかイギリス人の捕虜もいるし、当然ドイツ人も登場する。このごった煮のような集団生活のなかに、国家的・民族的・階級的な対立があることは当然であるが、ルノアルはここに、それでもなお各個人が、人間個々として直接に、そうした条件をぬきにして接触しあうものであることをもしめている。

第二部は高地山間の捕虜収容所である。ここでは、その収容所長であるドイツの貴族フォン・ラウフェンシュタイン(エリッヒ・フォン・シュトロオハイム)とフランスの貴族ポアルヂウとの対面が、おもなテーマとなっている。すなわち、フランスの貴族もドイツの貴族も、貴族という点では同様であり、これは没落階級であることを、二人は自覚しているのである。そして彼等は、国境をこえた親愛感によってむすばれるポアルヂウがマレシャルとロザンタルの脱出のために自分を犠牲にするのもそのためだし、フォン・ラウフェンシュタインが、ポアルヂウにピストルをむけながら、殺すつもりはなく脚をねらったのも、そのためである。それにもかかわらず、ポアルヂウは致命的な重傷を負って、死の床につくこととなった。フォン・ラウフェンシュタインは、収容所の唯一の鉢植の花を切って、彼の死のはなむけとした。

第三部は、脱出に成功したマレシャルとロザンタルが、ドイツの出征軍人の妻の家にかくまわれ、やがてそこからスイス国境に潜入するまでである。ここでは、ルノアルの説く国境をこえた人間愛、いいかえれば国境は単に人間がつくったものだという観念が、具体的にうつくしくスクリーンのうえにうつしだされた終結部である。ここでは、ドイツの出征軍人の妻エルザ(ディタ・ペアロ)とマレシャルとの言葉——国語——をこえたラヴ・シンが圧巻である。エルザは「コオフィができました」と片言のフランス語でいい、マレシャルは「青い目！」と片言のドイツ語でいう。

そして二人は、エルザの家をでて国境にいそぐのであるが、そこに平和はいまのところ「大いなる幻影」だというせりふがある。だれでもが平和に対して「大いなる希望」をもつが、それは結局大いなる幻影にすぎないという考えかたは、残念ながら当時のルノアルの実感であったろう。しかしそれでも、スイスの国境を眼前にしながら、国境は人間がつくったものであると断言してはばからないのがルノアルの本心である。だからこそ、映画の最後に、雪野原をこけつまるびつ行く二人をロング・ショットでだして、ドイツの監視兵に、「もう射つな。あすこはスイスだ」といわせたのである。

こう書いてくると、この映画がかなり観念的な作品におもわれるかも知れないが、そんなことは絶対にならない。これは作品を見ればわかることであるが、文章に書くところ書かざるをえないのが残念だ。描写はすべて具体的で、目に見えるもの・耳にきけるものとなっている。

たとえばドイツ人とフランス人との国民としての対立は、ギャバンがうたう戦勝の「ラ・マルセイエズ」にあらわれているし、ドイツ人とフランス人の個人としての親愛の情は、営倉にいれられたギャバンとドイツ兵士の交渉にあきらかである。

またフランスの貴族ポアルヂウが二人の脱出をたすけるために、フリュートをふいて所長フォン・ラウフェンシュタインの注意をひこうとしたことや、所長がポアルヂウの死の床に花をかざって、没落する階級のはなむけとするあたり、いずれも具体的なふかい意味をもった表現となっていた。

さらにエルザとマレシャルのドイツ＝フランス合作のラヴ・シンがそのままに、人間愛が国境をこえたものであることを雄弁に物語っていることはいうまでもない。

昨年ベルギーのブリュッセルでひらかれた国際博覧会で、世界中の批評家がえらんだ映画史上のベスト・

テンにこの作品がはいっていたことは、当然すぎるくらいに当然である。ぼくもさいわい投票させてもらったので、これを上位において書きおくれた。最近フランスではこの映画の再上映もおこなわれている。そしてその声価は20年まえよりもさらに高まりつつある様子である。

日本ではこの映画は、戦前にはドイツ大使館からの横槍で、上映ができなかった。ドイツ貴族を演じるフォン・シュトロオハイムがユダヤ人だからだという抗議だったが、この作品自体がしめす自由主義・ヒューマンズムが、ナチ・ドイツの気にいらなかったことはたしかであった。そして、戦後ようやく日本でもこれが上映されたのである。

(1月25・28日、2月1・4・8・11・15・18・22・25日、3月1日の11回、毎回2時から上映)

国立近代美術館フィルム・ライブラリ